

隠口の 長谷の川の

上つ瀬に 鵜を八つ潜け 下つ瀬に 鵜を八つ潜け

上つ瀬の 鮎を食はしめ 下つ瀬の 鮎を食はしめ

くはし妹に 鮎を惜しみ くはし妹に 鮎を惜しみ

投ぐるさの 遠ざかり居て

思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安けなくに

衣こそば それ破れぬれば 継ぎつつも またも合ふといへ

玉こそば 緒の絶えぬれば くくりつつ またも合ふといへ

またも逢はぬものは 妻にしありけり

【語釈】

*長谷：原文にも「長谷」とある。泊瀬の地は、長く続く谷のイメージがあつたのだらう。

*鵜を八つ潜け：鵜飼である。八つは原文に「八頭」とある。八羽のことで、ただ「多くの鵜を使ふ意」（代匠記）。「八」は、多いことをいう。

*くはし妹：美しい妻。自分の妻をこう言うのは、死者となつた妻の霊を慰めるため。なかつた、ということか？ あるいはまた鮎が死者への供物だったか？ なお、この

二句の繰り返しは西本願寺本にはないが、元暦校本万葉集などの写本による。長歌では3253番のように末尾を繰り返す例はあるが、途中に同じ句が繰り返される例がないことから、誤写として省く活字本もある。しかし、「鮎遠惜」が次に「鮎矣惜」と

一字意図的に変えられていることから、もともと繰り返しだったと見たい。この歌が謡い物だったからであろう。なお土屋・私注にアユIIあやかると説。

*投ぐるさの：仮名書きの「さ」は、ヤリとか箭（矢）の古語と解し、遠くへ投げることから「遠ざかり居て」の枕詞とみるのが通説。しかし、箭を投げて魚を捕る漁法が各地に広く行なわれていたことによる、とする岩波・日本古典文学大系の説も捨てが

たい。ただしまた、鮎を捕る程度に投げる箭は近くへ投げるものだろうから「遠く」の語へ続けるのはどうか？

*遠ざかり居て：古義は、妻が埋葬されたので家から遠く離れた意だという。葬るの語意は放ちやる意味のハフル（放る）であつたことを考えれば、「投ぐるさ」とも関連

して理解することができるが、今はこれを採用する自信が無い。

*思ふそら：「そら」は、「若い身空で」などというときの「そら」。身の上をいうらしい。

*安けなくに：文法的には「安し」の未然形に「無く」が続き、「なのに」の意の助詞「に」が付いたもの。思いも安らかでは無く、の意。

*嘆くそら安けなくに：（私の）嘆く心も安らかで無く。

*くくりつつ：結びつけて輪にし、切れたらまた結びつけて輪にし。
*またも逢はぬもの：物は合わせることができるが、「合う」を同音の「逢う」に転じて、ふたたび逢えないもの、と続けた。「死」を避けてこう言ったのである。

【総釈】

これも夫の立場から詠んだ亡妻挽歌である。

最初の一行二句は場所の呈示であり、泊瀬は既述のように葬送の地であった。次の二行は四句づつ対の繰り返しで、泊瀬川の禊ぎ祓えの神事句の世俗的な転用である。神事の句を鵜飼いに転用して、鵜に「鮎を食はしめ」から、クハシの同音で「くはし妹に」と、亡妻を悼む句に続けた。

次の「鮎を惜しみ」の意味は、語釈では妻をかえりみず鵜飼いに熱中したと解いたが、ほかには表面的な意味のままに「妻に鮎を与えるのが惜しくて」（岩波・新日本古典文学大系）とも解されている。ただし、鮎を食わせなかったために妻から遠ざかっていたと断つては、食い物の話に矮小化されてしまう。

歌意の中心になるところは、妻と遠ざかっていて我が心は安まらないという後悔の気分である。いかなる形であれ、歌い手が後悔すること（悔やむこと）は死者の鎮魂のためであった。後半では、衣だったら破れたら縫いつぐこともできるし、玉を貫いた紐が切れたのなら何度でもつなぎ合わせるができると具体的な例をあげながら、そうはゆかないのが人間の命だと歌い収める。末尾「妻にしありけり」は、強調の助詞「し」、詠嘆の助動詞「けり」で収めている。この「けり」は、その事実始めて気付いた感動の意味もこもっていて、後悔の気持ちを強めている。

この長歌は、鵜飼いや縫い物を詠んでいて、庶民の生活感覚をよく感じさせる。泊瀬地方で歌われた挽歌で、葬送のときなどに歌われたのであろう。

3331 隠口の 泊瀬の山 青旗の 忍坂の山は

走出の よろしき山の 出立の くはしき山ぞ

あたらしき 山の 荒れまく惜しも

【語釈】

*青旗の：「青」は緑に通ずる色。「青旗の 葛城山に」（509）といった用例もあり、緑に覆われた山を指すものようであるが、また天智天皇が危篤に陥ったときの太後の歌に「青旗の木幡の上を通ふとは…」（148）とあって、そこに注したように、神を招いたり、葬具であったりした旗を指すこともあった。ここも挽歌であることを考えると、忍坂の山に掛かる語とはいえ、葬礼との関連で歌われたものと思われる。

*忍坂：押坂とも書く。今の桜井市東方の山手にあたる地名。泊瀬よりは桜井市よりで、泊瀬山に対して初瀬川の向こう、対岸に位置する。

*走出の：尾根が長く突き出た地形をいう。ここは山の尾根が初瀬川に突き出ているさまをいうのだらう。

*よろしき山：「よろし」は、「寄りし」つまり好ましくて心が寄りた、立派な。

*出立の：聳え立つ山の姿は。

*くはしき山：美しく、立派な山。

【総釈】

これは、3263番の長歌とよく似た3330番の亡妻挽歌と組になった歌である。短歌形式でもないので反歌とはなっていない。独立した長歌であり、最初に「山」を提示してこれを賛美し、末尾を五・三・七音で結ぶ形式は3222番と同じである。つまり古い長歌の形式をふまえている。ただし、3222番は山を誉め称える歌になっているが、この歌は、末尾が3247番「あたらしき君が老ゆらく惜しも」と同じ表現になっている、山の荒れることを惜しむ内容になっている。

もともと誉め称えられた泊瀬山や忍坂山が、なぜ荒れると詠まれるのか？ 『日本書紀』雄略紀には、この歌と共通する山誉めの次の歌謡がある。

隠口の 泊瀬の山は

出立の よろしき山 走出の よろしき山の

隠口の 泊瀬の山は

あやにうら麗し あやにうら麗し

山誉めの末尾を「うらぐはし」と詠むのは3222番の三諸山の歌と同じである。つまりこれから分かるように、泊瀬山の山誉めの歌が実際に歌われていて、それが挽歌に転用されたのである。せっかくの美しい山が荒れると詠まれたのは、泊瀬山に死者を葬ったときの吊いの歌だからであった。中西・テキストは「葬歌には国ほめ歌が必要だった」とする。「国ほめ」はこの場合、泊瀬の山誉めにあたる。

山には山の神がいた。人間の死はケガレであった。山を誉めることは山の神を誉めることで、死者を山へ葬るために行なうべき山の神への挨拶であったかも知れない。

以上の二首と、次の歌を含めて三首が一組になっている。

3332 高山と 海とこそば

山ながら かくも現しく 海ながら しか真ならめ

人は花ものぞ うつせみの世人

右二首

山と海の自然を呈示して、山は山のままに厳然としてそこにある（現しく）、海は海のままに確かな存在としてある（しか真ならめ）、と歌う。そのように厳然としてあり続ける山や海に対して、この世の人は花のようにはかないものだ、と花に対比して歌う。前二首が、「こもりくの泊瀬」という具体的な場所における死者の弔いだったのに対して、この三首目では人間の命の一般的なかさを嘆いて全体を閉じる。伊藤・釈注は、言葉数が「一首ごとに量が小さくなってゆくのは、繰り言による嘆きが寡黙の中に深まってゆく姿を示すようで、味わいがある」と評する。